

[dōnk]

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0803

三重県津市柳山津興600-5 滝澤方
600-5, Yanagiyama-tsuoki Tsu-shi

TEL 090-4867-1476

FAX 059-227-8010

№123 mars 2022 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

ジュール・イルマン総領事 来県す！！

——総領事様同行記

滝澤秀行



在京都フランス総領事館のジュール・イルマン総領事が3月15日・16日、三重県に来県されました。

初日の15日は、鈴鹿市のドミニク・ドゥーセのお店を訪ねられ、その後鳥羽市役所へ表敬訪問されました。鳥羽市はフランス人観光客にもとても人気のある観光地とのこと。鳥羽市役所には昨年9月よりポーリン・カゾ (Pauline Casaux) さんが国際交流員として働かれています。15日の晩はイルマン総領事とポーリンさんをお招きし、三重日仏の役員数名にて、津新町のアフリカンフレンチのお店「カラファー」で歓迎食事を催しました。

16日は、朝9時より津市役所にて、前業津市長さまへの表敬訪問。前業市長によると、フランス・アン(Ain)県のオヨナ市と津市の民間企業交流が実を結んでいるとのこと。(ちなみに4年ほど前には、オヨナ市企業訪問団の津市への歓迎会にて、会員浅野氏が通訳のお手伝いをしています。)

10時からは、三重日仏協会会長の三重大学学長・伊藤正明さまを訪問。重要な会議の途中、時間をとっていただき面会を果たしました。その後三重大学国際交流センターにて、大学への留学生の現況・今後の見込み話等に盛り上がりました。ティエリー・グットマン先生とジャン＝フランソワ・ダムム先生が同行されました。



11時30分には、三重県庁にて一見県知事さまへの表敬訪問。一見知事は20年ほど前、パリにある国の機関で2年間ほど勤務されていたとのことで、イルマン総領事との初めの挨拶は流暢なフランス語で挨拶をされていました！「三重県は“日本のプロヴァンス”を目指す。自然を守り観光に力を入れて行く」との知事の言葉に、イルマン総領事も深く同意されておりました。また、最後に2016年伊勢志摩サミットにて振舞われた日本酒のプレゼントがありました。



こんな時だからこそ～“ちょっとフランス音楽はいかが？”



～フランス音楽とフランス文化、フランスでの実体験、
手軽に聴けるお勧めの曲などのウンチク～ その4

ピアニスト 伊藤隆之

春の陽気が感じられる今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。

ご縁あって「どんく」に掲載させていただいております「こんな時だからこそ～“ちょっとフランス音楽はいかが？”」シリーズも第4回目を迎えました。

このシリーズ、元々は大学のオンライン授業で生徒たちにフランスの文化・音楽を知ってもらおうと書いたものですが、この時課題にした「フランス音楽とフランス文化、フランスでの実体験、手軽に聴けるお勧めの曲などのウンチク」を「どんく」でもご紹介させて頂いております。

日本人とフランス人のお名前 (2)

前号で「フランス人は外国人の名前や外国の言葉もフランス語読みしてしまう」とお話ししましたが、今回はその続きです。

35年ほど前、CDがないまだレコードだった時代に、パリのレコード店でこんな親子の会話を耳にしました。

娘：「あ、ママ、見て見て！ ミハエル・ヤクソンのレコードだ！」(これはドイツ語読みに近い？)

母：「何言ってるの？ これはミッシェル・ジャクソンなのよ！」(フランス語読みにしすぎ)

...どっちも違うだろう、と笑ってしまいました。

皆さん、もう誰の事かお分かりですね。ポップの王様、故マイケル・ジャクソンの事です。

今でこそ、フランス人たちも「マイケル」と発音するようになりましたが。

当然ながら、我々日本人の名前もなかなかフランス人からは正確に発音してもらえません。

沖縄で外間(ほかま)さんという姓がありますが、フランス語はHを読まないのので「オカマ」になってしまい嫌だとおっしゃっている方の話を聞いた事があります。

もし杉岡ひろしという人がいたら、フランス語の発音の規則にのっとり「スジオカ イホシ」、又は「スュジオキャ イホシ」と読まれる可能性が高いです。

逆に、日本人がフランス人の名前を正しく発音していないケースもあります。

例えばHANON。ピアノの練習曲で日本でも「ハノン」として有名ですが、HANONはフランス人ですので、Hを読まず「アノン」と発音するのが本当です。

シャンパンのC.Heidsieck(エドゥシック)社の御曹司で世界的なピアニストのEric Heidsieckも、初来日の時に英語読みされて以来、日本では「ハイドシエック」と呼ばれています。

フランス人が日本人の名前を発音する時、ひらがなで4文字以上になる名前は発音が難しくなるようです。私の名前「たかゆき」もそうですが、アルファベットにすると長いのが覚えにくいようです。

「たかゆき」が覚えにくいから「やあ、タコヤキ！ 元気？」と、勝手に「たこ焼き」にされてしまった事もありました(涙)。

ひらがな 4文字の「たかゆき」ですが、アルファベットにすると彼らはどこで区切れれば良いのか分からずに、混乱するようです。

スペルを訊かれて「T-A-K-A…」と答え始めると、まどろっこしくなったのか途中で「もういい」と言われた事もあります。

逆にITOは短いので「それだけ？」と言われてしまいます。

また、その字面からか？ 何故かロシア人と勘違いされ「タカユスキー・イトヴィッチ」と勝手に加筆された郵便物が届いた事があります。確かに Takayuki の間に s をひとつ加えるだけで Takayuski になると感心しましたが。ヴィッチはどこから来たのでしょうか？ (笑)

ここで日本の漫画の話をちょっと。

テレビやインターネットによりフランスでも日本のアニメが爆発的にヒットし、漫画もどんどん仏語訳されています。今やフランスには日本漫画専門の本屋まであるほどです。

最近では、「Manga」(フランス語の決まりに乗っ取って「モンガ」と発音)と書かれたコーナーが、フランスの殆どのスーパーマーケットで見受けられます。

テレビではフランス語吹き替えの「ドラゴンボール」、「キャンディ・キャンディ」、「セーラームーン」、フランス革命を描いた「ヴェルサイユのばら」(フランス語のタイトルは「レディ・オスカル」)が放映されていました。

「キャプテン翼」(フランス語のタイトルはなぜか「オリヴィエ」)が大ヒットした時期があったのですが、あるフランス人は子供の頃に、この「オリヴィエ」を見てサッカー選手になりたいと思い、本当にプロのサッカー選手になったそうです。

日本のアニメが子供たちに与える影響力は凄いですね。

フランス人に根強い人気があるのは「ワンピース」。10年ほど前、パリでワンピースコンサートがあり、私も聴きに行きました。

その時驚いたのは、フランス人観客の殆どがテーマソングを日本語と一緒に歌っていた事でした。

恐らくフランス人アニメオタクがネットで日本語の歌詞を見つけて覚えたのでしょう。

これには作曲者の田中公平さんもビックリされているようでした。

宮崎駿さんのスタジオジブリの作品も大流行。

パリでジブリ映画音楽の作曲家、久石譲さんのコンサートがありました。実は私、このコンサートにも行って参りました(笑)。会場がコスプレしているフランス人だらけ(一番多かったのは「魔女の宅急便」のキキ)。久石さんが登場した途端、まるで神の降臨と言わんばかりの「ウェー!!」という歓声！しかも、久石さんがひとこと「Bonsoir」とフランス語を言ってしまったので、更なる歓声鳴りやまず、演奏が10分ほど始ま

りませんでした。

この異常な熱狂ぶりには、さすがの久石さんもかなり驚かれているようでした。

日本アニメ映画についても、あえて日本語で聞きながらフランス語字幕を見て勉強するフランス人が多くなっています。このように漫画やアニメの影響から、日本語そのものに関心を持つフランス人が増えてきているようです。

日本の文化と日本語の発音は、こうして少しずつフランス人に慣れ親しまれつつあるようです。これからは、私も「たこ焼き」にされずに済むかも？

今回のお勧め曲 ティボー、コルトー、ロン、フランソワの演奏曲

ジャック・ティボー(Jacques Thibaud)は8歳でリサイタルを開き、16歳でパリ音楽院を首席卒業したヴァイオリニストです。ポルタメント(滑らかに音程をずらすように奏する技法)を多用した、抒情的で語りかけるようなその奏法は誰にも真似が出来ないと言われ、フランス屈指の演奏家として君臨しました。彼は72歳の時、日本公演に向かう途中の飛行機墜落事故で他界し、その死が惜しまれています。チェロのカザルス、ピアノのコルトーと共に「カザルストリオ」を結成し、黄金トリオとして多くの名盤も残しています。

ピアニストのアルフレッド・コルトー(Alfred Cortot)は古典から近代まで、幅広いレパートリーを持ち、個性的なロマンティシズムを打ち立てた演奏家です。特に彼の弾くショパンは世界的な定評がありました。彼は音楽教育にも力を入れ、パリ・エコールノルマル音楽院を創設しました。又「コルトー版」で有名な膨大な数の学術的な楽譜の出版にも尽力しました。

マルグリット・ロン(Marguerite Long)は、フランス近代ピアノ作品の演奏で有名な女流ピアニストです。彼女はフォーレ、ドビュッシー、ラヴェルから、彼ら自身のピアノ作品を後世に伝えて欲しい、と指名されるほどの弾き手でしたが、ショパンの作品もまた得意としていました。ロンは音楽教育にも尽力し、前述のヴァイオリニスト、ジャック・ティボーと共に「ロン・ティボー国際コンクール」を創設しました。

ロンの弟子であるサンソン・フランソワ(Samson François)は、彼女の教えを受け継ぎ、彼もまたフランス近代曲の演奏家として名を残しています。フランソワは、第1回目のロン・ティボー国際コンクールで見事、優勝を勝ち取りました。

今回は20世紀初頭からフランス音楽界を駆け抜けた彼ら4人の巨匠たちの録音をご紹介します。録音は大戦前後のもので音質はよくありませんが歴史的な名演が多いです。(フランソワは他の演奏家のよりも若かったので、音質の良い録音も残っています。)

César Franck: Sonate pour violon et piano フランク: ヴァイオリン・ソナタ

(演奏: ティボー&コルトー)



まずは、ティボー&コルトーの演奏による、セザール・フランクのヴァイオリン・ソナタをご紹介します。セザール・フランクはベルギー出身の作曲家ですが、パリで長く活躍し、フランス近代音楽に多大な足跡を残しました。彼のヴァイオリン・ソナタはその代表作で、4楽章形式の長大な曲です。ティボーとコルトーの録音は歴史的名演とされています。サイトで聴く場合は、「César Franck Sonate pour violon et piano-Jacques Thibaud Alfred Cortot」というサイト名で検索すると4楽章全てが聴けます。

CDで聴く場合は、ここでご紹介する「フランス近代3大ヴァイオリン・ソナタ」(フランク、フォーレ(第1番)、ドビュッシー)が1枚で聴けるものがお勧めです。

Fauré : Quatuor pour piano et cordes No.2 フォーレ:ピアノ4重奏 第2番

(演奏:ロン)



次にご紹介するのは、フランス近代作品の演奏のスペシャリスト、ロンの演奏です。

ピアノ4重奏とはピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが共演する室内楽の事で、この録音のヴァイオリンはティボーの演奏です。録音時は第2次世界大戦の真っ最中。ティボーの息子が前線で戦っていた為、演奏者全員が無事を祈るように演奏した、歴史的な名演とされています。残念ながらこの録音直後、ティボーの息子の戦死通知が来たという悲しいエピソードがあります。

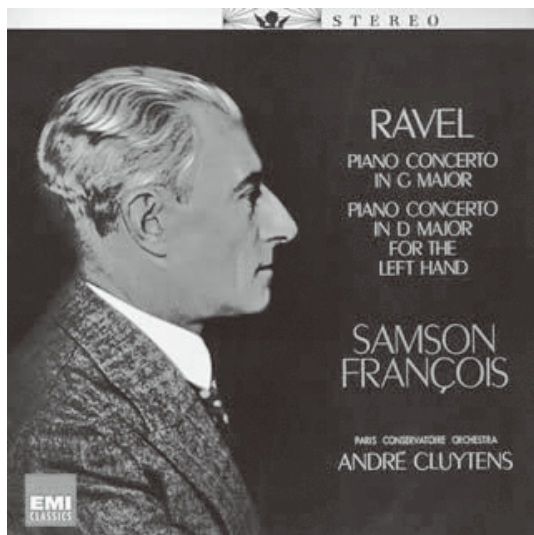
このCDにはピアノ四重奏曲第1番、第2番の両方が入っています。

ロンはこの他にも、以前もご紹介しましたように、フォーレのピアノ作品を幾つか録音しています。サイトでも沢山紹介されていますが、その中で一度に1時間10分52秒もアップされている動画がある事に気がきました。この動画には上記ピアノ4重奏曲第2番の他、ピアノとオーケストラのためのバラード、即興曲第2番、即興曲第5番、舟歌第6番、夜想曲4番、夜想曲第6番、往年の大歌手のニノン・ヴァランが歌う歌曲「ゆりかご」のピアノ伴奏が収録されています。フォーレの名曲揃いとなっておりますので、フォーレ愛好家にはご機嫌な動画と言えるでしょう。

Ravel :Concerto en sol majeur ラヴェル:ピアノ協奏曲ト長調

Ravel :Concerto pour la main gauche en ré majeur ラヴェル:左手のためのピアノ協奏曲ニ長調

(演奏:フランソワ)



今回最後にご紹介するのは、サンソン・フランソワの演奏です。

即興的で常に新しさを感じさせるフランソワは、フランスの「プレリュード、コラールとフーガ」、フォーレのピアノ曲数曲、ラヴェルの殆どのピアノ曲を録音しています。残念ながらドビュッシーの全曲録音中に体調を崩したまま46歳の若さで急逝しました。

前述したフランソワの録音はどれも素晴らしい、の一言に尽きますが、今回はその中でラヴェルのピアノ協奏曲を取り上げます。

ラヴェルのピアノ協奏曲(ト長調)は、ラヴェルがマルグリット・ロンに献呈した曲です。第1楽章と第3楽章には、当時ヨーロッパに入ってきたジャズやルンバの要素も感じ取れる、ユーモラスな作風となっています。

フランソワの録音は、作曲者ラヴェルの真意を汲み取り、絶妙なテンポ感を見事に再現した名演となっています。

左手の為のピアノ協奏曲は、第1次世界大戦で右手を失ったピアニスト、P・ウィトゲンシュタインからラヴェルが依頼されて作曲した、1楽章形式の名作です。

フランソワは前述の「ピアノ協奏曲ト長調」と、この「左手の為のピアノ協奏曲」の2曲でフランスのディスク大賞を受賞しています。

最後にちょっと補足を…。

コルトーとフランソワは、世界的なショパン演奏家として語り継がれており、2人ともショパンのピアノ作品の殆どを録音しています。

そのショパンは、父親がフランス人だったため、ポーランド人でありながらもフランスにおいては、フランス人としての認識も強いと言われているようです。コルトーとフランソワ。この2人の即興味溢れるショパンも是非聴いてみてください。

自宅で過ごす事が多くなったこの頃、フランス音楽を聴きながらワイングラスを傾ける時間があらん事を！

どうぞ次回もお楽しみに。

4/10(日) 柏木隆雄氏 「第21回文芸講演会」

毎回好評を博しております文芸講演会も第21回を迎え、今回も放送大学三重学習センターとの共演で、下記のように開催いたします。

一般公開、入場無料です。多数のご来聴をお待ちしております。

会場：三重県総合文化センター内 生涯学習センター4階 中研修室

時間：午後2時～4時

演題：「バルザックの『暗黒事件』とフランス革命」

講師：柏木隆雄 先生

(大阪大学名誉教授、前日本仏文学会会長)

＜講師のひとこと＞

オーストリアの作家ツヴァイクの『ジョゼフ・フーシェ』には、革命期にカメレオンのように権力の側に寝返りを繰り返し、出世を遂げていくフーシェと並んで、革命の完成者として颯爽たるナポレオンが、権力に酔いしれて、世界制覇へと誇大な妄想に駆られていく姿が描かれています。2022年3月4日の時点でのウクライナ侵攻に突き進むプーチンの姿に重なることに驚きます。文学は歴史研究書以上に、赤裸々な「真実」を語る事が、このことでも知られます。バルザックの小説を通して、フランス革命がどんなものであったかを見るのも、現代にあって意義あることだと思います。

